ごとう通信

第 232 号
令和2年4月1日

皆さんはどんな日常をお送りでしょうか。今回のコロナショック、さすがに報道だけでなく、医療者としての自分自身も見通しが甘かったなぁと思います。最初はクルーズ船の話だけで、何とか国内に持ち込まないでほしいとは思いましたが、現代社会、そんな一方面だけの交流ではないですよね。インバウンドという言葉で多くの外国人を受け入れていたのですから、話はすでに年明けから始まっていたのかもしれません。

連日の報道を見ていると気がめいってしまいますが、何とか早く治療薬、そして予防用のワクチンが開発されることを祈っています。

今回、マスコミでもいろんな感染症専門の医師が登場していますが、「自分にはできないなぁ」と思いました。要は目に見えないものとの戦い。感染予防の対策をいくらやっても、１００パーセント防御できるとは言えません。完全な防護服を着て処置をしても、それを脱ぐときにどこかに付着してしまうかもしれません。それでも対応してくれる。本当に心強い専門家です。

さて、こんな自粛ムードですが、道端の桜には癒されますね。今年は暖冬で開花が早かったので、先月上旬には早咲きの桜が咲き始めていました。多くの人出があり、海外の方たちも入り乱れて大宴会をする花見も良いですが、通りすがりに素晴らしい桜を目にできるのも幸せです。昔から花見といえば宴会のイメージでしたが、こういう楽しみ方も粋ですね。来年以降の花見も「２年分騒ぐ！」ではなく、花見そのものの在り方が変わってもいいかなぁと思いました。

医療の使い方

今回のコロナウィルス騒動で連日、そして一日中報道されているので耳にされた方も多いと思いますが、「医療崩壊」という言葉があります。患者さんが多くなりすぎて医師の手が回らず、処置すべき人に処置できない事態になることです。今回の騒動で言うと、軽症で少し熱っぽいくら